

# 日本福祉大学附属図書館所蔵草鹿家文庫の 『太政官日誌』について

ノートルダム清心女子大学文学部 准教授 藤實 久美子

本稿は、2013年8月26日に、日本福祉大学美浜キャンパスに所在する附属図書館でおこなった、草鹿家文庫本『太政官日誌』（請求番号424、請求番号425）についての調査報告である。以下、調査をおこなうに至った経緯、調査方法と調査手順、調査結果、展望を記す。

## 1. 経緯

太政官とは、明治初年に設置され、明治18年(1885)12月に内閣制度が創設されるまで存続した、最高行政官庁のことである。太政官の機関紙が『太政官日誌』である。『太政官日誌』は、慶応4年(1868)2月に創刊されて以後、明治9年12月まで発刊された。通巻1,178号からなる。

『太政官日誌』をはじめとする維新政府系の出版物、いわゆる官版日誌類は、幕末維新史研究の基本史料とされる。だが、日本近世・近代史研究の狭間であって、官版日誌類の基礎研究は立ち遅れていた。この動向に照らし、2008年秋、戊辰戦争期木版刊行物研究会（以下、研究会と略記する）は発足した<sup>1</sup>。この研究会を母体にして遂行されたのが、2010年(平成22)度～2012年(平成24)度科学研究費助成金基盤研究(一般(C))研究課題「『太政官日誌』を対象にした史料学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」(課題番号22520699、研究代表者：藤實久美子)である。この研究の結果、2013年3月段階で、『太政官日誌』は日本国内322機関に所蔵されることが明らかになった<sup>2</sup>。この322機関のなかに日本福祉大学附属図書館が含まれており、かつ『太政官日誌』発刊の意図や初期発刊の様態を考察するにあたって、私たちが注目している慶応4年版を2種収蔵し、また伝来が確かな貴重な文庫であることから、研究会のメンバーである山

口順子(19世紀日本の出版・メディア史研究者)と筆者は調査をおこなうことにした。

## 2. 調査方法と調査手順

青木美智男「草鹿家文庫について」<sup>3</sup>によれば、草鹿家文庫は加賀国大聖寺藩の典医草鹿家旧蔵本である。全705点3,350冊のうち、その大半は、近世期に収集されたものであるが、明治期に購入したものも多いという。

では、草鹿家文庫中の『太政官日誌』2種は、「京都版」2系統3版(発刊順に「東久世殿系Ⅰ(第1版)」「東久世殿系Ⅰ(第1版修あり)」「東久世殿系Ⅱ(第2版)」「東久世殿系Ⅱ(第2版修あり)」「東久世公系(第3版)」「東久世公系(第3版修あり)」)、またはこれらの混合体であるのか。あるいは「江戸・東京版」2版5種(発刊順に「小本a(第1版)」「小本b(第2版)」「小本c(第2版修あり)」「中本c(第2版修あり)」「中本c'(第2版・第13号に摺り消しあり)」)のいずれに近似した史料なのであろうか。なお、「修あり」とは、同じ板木(同版)によって印刷されるが、入れ木によって修正を施したものをいう。さらに入れ木とは、板木調整後に誤りなどに気づき訂正するときにおこなわれる技法である。入れ木部分の版面は、元の版面よりも少し出っ張っている場合があり、墨付きの具合から板本を見ているとわかる。近年の板木研究によって、予め小片に文字などを彫ってから、元の板木に埋め込んだことが解明されている<sup>4</sup>。

書誌用語の説明から本道に話を戻すと、草鹿家文庫本2種の位置を明らかにするために、本調査では、集合体記述とアイテム記述という2つの方法を使い分けておこなった。集合体記述では、1つの秩序を形成している史料のかたまりの概要を、「太政官日誌調査 Aカード(201308 試作品)」

(以下、Aカードと略記する) 1枚に記入する。一方、アイテム記述では、原則として1号1冊の単体に対して、「太政官日誌調査 B II (20130815) カード」(以下、Bカードと略記する)<sup>5</sup> 1枚を作成する。1号1冊(本)は研究会で『太政官日誌』用に新たに造った用語で、発刊当初より1号1冊で完結している本を指す。

また、異版・同版チェックリスト(13機関22本のデータが通覧できる「『太政官日誌』諸本比較表<京都版>(20130428)」<sup>6</sup>と、6機関1個人13本のデータが通覧できる「『太政官日誌』諸本比較表<江戸・東京版>(20130503)」<sup>7</sup>)との照合をおこなった。この異版・同版チェックリストは、①表紙、②本文、③刊記に関わるデータの3要素からなる。対象は「京都版」「江戸・東京版」の第1号～第13号までである。データを3要素に分けるとする方法は、共同調査の結果、導き出されたものである。すなわち、2012年3月の大阪天満宮御文庫や大阪市立中央図書館での共同調査の結果、製本段階で一つになる①表紙、②本文、③刊記ではあるが、そもそもこれらは一体のものであるという先入観は排除されなければ『太政官日誌』の作成・流通過程は明らかにならないという視点から生み出されたものである<sup>8</sup>。

さて調査では、一括状態、大きさ、刊記をみて、Aカード、Bカードどちらの作成にまずとりかかるとかを判断した。つぎに、「京都版」であれば異版・同版チェックリストを用いてAカードに記述し、「江戸・東京版」であればBカードの作成にとりかかることにした。なぜならば、「江戸・東京版」のサンプル・データが少ないため、詳細なデータ採取が重要であると考えたからである。

これらの手順にしたがって作成したカードは、請求番号424『太政官日誌』についてAカード1枚、請求番号425『太政官日誌』についてBカード31枚である。

### 3. 調査結果

#### (1) 請求番号424『太政官日誌』慶応4年第1号～第9号(京都版)

- ・第1号から第9号合綴(麻縄・綴じ部2箇所)、

ただし第1号のみ表紙はない。

- ・表紙・本文・刊記は楮紙である。
- ・異版・同版チェック(本文):第1号の、大坂西本願寺で各国公使の応接にあたった外国事務総督・東久世通禧は「東久世公」ではなく「東久世殿」(1丁表)、第2号の史官の名前は「生形三郎」、第3号の文中文字は「只管」(5丁表)、第6号の高札第3札のキリシタン禁令は、一条書き「き里したん邪宗門之儀ハ堅く御制禁たり(後略)」、第8号の箱館奉行所の荒木十兵衛は「多氣四郎」ではなく「多喜四郎」(5丁裏)とされる。ちなみに、キリシタン禁令高札第3札は、閏4月の改訂後、「一切支丹宗門ノ儀ハ是迄御制禁之通固くノ可相守事ノ一邪宗門之儀ハ固く禁止候事ノ慶応四年三月太政官」という具合に、二条に分割して表記される。
- ・異版・同版チェック(柱刻):第1号～第4号の丁付は「一、二、三…」、第5号「〇五ノ一、〇五ノ二…」で、又丁はない。
- ・異版・同版チェック(表紙):第1号の月は「三月」、号数表記は「第壹」。第9号の月は「四月」。
- ・異版・同版チェック(刊記ほか):板元とその住所表記は「御用御書物所 京東洞院三條上ル町 村上勘兵衛、同堀川二條下ル町 井上治兵衛」であり、板元の住所表記に「京」がある。取次は「京三條通柳馬場東角 辻本仁兵衛、大坂心齋橋通唐物町 浅井吉兵衛、同心齋橋通博勞町 岡田茂兵衛、同心齋橋通南八丁目 大野木市兵衛」の4者で、4者は右より左に印刷されている。第1号から第9号の刊記には匡郭があり、爪見出しは第9号にのみある。
- ・蔵書印はない。

#### <京都版のなかでの位置>

- ・第1号～第9号に異版の混入はない。第1号の表紙の「第壹」表記は特徴的で、天満宮御文庫・鹿田奉納本(請求番号別-77-2)と同じである。
- ・本文はすべて「京都版」東久世殿系II(第2

版)である。大阪天満宮御文庫・鹿田奉納本(請求番号別-77-2)と同版同刷である可能性が高い。

- ・刊記の取次記載より大坂流通本であると推察され、第9号のみ爪見出しがあることから大阪市立中央図書館(請求番号210.58 S3)と、少なくとも初期の流通経路は同じであった可能性が高い。
- ・ただし、表紙・本文では一致する大阪天満宮御文庫・鹿田奉納本(請求番号別-77-2)と、刊記の取次記載が異なることから、刊記は取次書店で付した可能性がここに生じてきた。

なお、『草鹿家文書目録』には「慶応4年1月」とあるが、「慶応4年2月」の誤りであろうと、図書館側に伝えた。

## (2) 請求番号425 太政官日誌 慶応4年第1号～第40号(江戸・東京版)

ここでは概要を記す。作成したBカードの情報は、本稿末尾の付表「草鹿家文庫425『太政官日誌』細目録」に掲げたので、適宜、参照していただきたい。

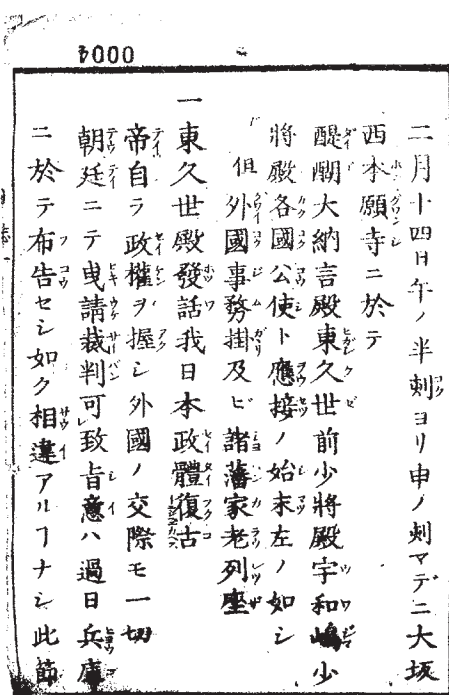
- ・基本的に上・下2箇所、紙縫りで綴じられているが、部分的に別の紙縫りで合綴されたグループのまとまりがある。まとまりごとに作成・流通経路が異なる可能性があるので、注意する必要がある。グルーピングは以下の通りである。

- (1) 第1号～第10号まで、最上部1穴で仮綴じた跡がある。現状は第9号と第10号を仮綴じて合綴。
- (2) 第11号～第15号は紙縫りで合綴。
- (3) 第16号～第20号は紙縫りで合綴。
- (4) 第21号～第30号は1号1冊本。
- (5) 第31号～第35号は紙縫りで合綴、ほかに4穴ある。
- (6) 第36号～第40号は1号1冊本。

- ・大きさはいずれも小本である。
- ・表紙・本文・刊記は楮紙である。
- ・異版・同版チェック(表紙):定価表示は、第7号(1匁)・第11号(1匁)・第13号(1

匁5分)・第14号(1匁)・第17号(1匁)・第18号(1匁)・第19号(1匁5分)・第20号(1匁5分)・第21号(2匁)・第22号(1匁5分)・第23号(1匁)・第24号(1匁5分)・第25号(1匁5分)・第26号(1匁5分)・第27号(1匁)・第28号(1匁)・第29号(1匁)。表紙の定価はすべて板摺りの印で、印字は黒色。位置は表紙の左下である。

- ・異版・同版チェック(表紙):「不許翻刻」は第7号のみない。そのほかにはある。「不許翻刻」は、第1号～第29号まで長方形の朱印。第30号～第40号まで丸朱印で枠ありである。



図版1 「江戸・東京版」慶応4年第1号(部分)」

- ・異版・同版チェック(本文):第1号では「東久世殿發話我日本政體復古」の右側に「ホツワ、セイタイフクコ」の読みルビ、左側に「イニシヘニカヘス」の意味カナが付されている(1丁表後ろから4行目、図版1「江戸・東京版」慶応4年第1号(部分)」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C07040124500(防衛省防衛研究所)、慶応4年戊辰 太政官

日誌 第1、第2画像目)。また「帝ノ命ヲ奉シ候」を5行目に挿入している(2丁裏)。

- ・異版・同版チェック(刊記ほか):板元はすべて須原屋茂兵衛で、その住所に第30号~第32号、第34号・第35号、第38号・第39号ともに東京がない。板元とその住所表記は「御用 御書物所 日本橋通壹町目 須原屋茂兵衛」である。取次はない。
- ・刊記がない号には0.5丁(半丁)の白紙(共紙)が付されていることが多い。最終丁裏の摺り方は匡郭のみ摺るものは第7号・第9号、第17号~第19号であり、匡郭を摺らないで共紙なしのものは第36号・第37号・第40号である。
- ・蔵書印などは第4号(22丁表)に「○悦」、第30号の後ろ表紙に「明治十六年東筑摩郡筑摩村井根励蔵」(墨書)とある。「筑摩」は現長野県松本市にある地区、「井根」は不詳。特記事項としては、つぎの点があげられる。
- ・第2号の「務」「與」字の墨汚れ、「後藤象二郎同」や、第4号の22丁裏下部と28丁裏「退出セリ」の「リ」に、とくに墨汚れがみられる。
- ・第3号の18・19丁の間に米粒が1つあり、所持者は食べながら読んだのではないかと、思われる。
- ・第11号~第20号には袋綴じの柱上部に茶色の紙片が貼られ、インデックス機能を果たしている。
- ・第27号の内題は「大政官日誌第廿七」。1字めは「太」とすべきところを「大」とする。
- ・第33号の尾題は「太政官日誌卅三」(「第」なし)、10丁に丁付がない。10丁裏は白紙で、摺りなし・刊記なし。
- ・第31号の富山藩届(1丁)など、袋綴じの柱上部に茶色の紙片が貼られ、インデックス機能を果たしている。内容は明らかに自藩近隣との関係である。

#### <江戸・東京版のなかでの位置>

- ・小本c第2版(修あり)と推察される。異版の混入はない。
- ・各号末に本文と共紙の白紙が付されており、

「江戸・東京版」も発刊当初より1号1冊本であったことが初めて明らかになった。「初めて」とするのは、『太政官日誌』現地調査報告書<sup>10</sup>にみるように、「江戸・東京版」は、生成りの原表紙の上に新しい表紙・題簽をつけて合綴したものが多く、また「京都版」と「江戸・東京版」が入り混じっているものが多い。とくに「江戸・東京版」は、丁付(1丁~84丁)が第1号~第12号まで連続しているため、発刊当初から第1号~第12号まで合綴されていたのではないとも考えられた。しかしながら、本調査によって、「江戸・東京版」は、いずれも1号1冊本として作成、販売されたことが明らかになった。

- ・本史料は1冊1号本の集合体であると考えられる。
- ・定価の表れ方、価格の並びは、JACAR: C07040125300、慶応4年戊辰 太政官日誌 第6より第10迄、JACAR: C07040125900、慶応4年戊辰 太政官日誌 自第11到第15、JACAR: C07040126600、慶応4年戊辰 太政官日誌 自第16到第20、JACAR: C07040127300、慶応4年戊辰 太政官日誌 自第21到第25、JACAR: C07040128000、慶応4年戊辰 太政官日誌 自第26到第30、国立国会図書館デジタルコレクション(NDL 請求記号CZ-2-01a)に一致している。
- ・本文は、前掲のJACAR: Cの慶応4年戊辰 太政官日誌と一致する。第2号の「務」「與」字の墨汚れ、「後藤象二郎同」ほかは中本に引き継がれることから、同版を使用して中本が印刷された可能性が高い。
- ・草鹿家での入手時期は、第30号のみ明らかで、明治16年以降である。しかし、ほかの号も明治16年以降の入手であるとは断定できない。例えば、第31号~第35号を最初に持っていて、あとを徐々に買い足したことも考えられるからである。
- ・インデックス機能を果たす紙片があり、利用について考えることができる。ただし、草鹿家以外での利用も念頭におく必要がある。

以上、入れ木による補訂の痕跡、表紙・本文・刊記の組合せによるバリエーションのなかでの、草鹿家文庫本2種それぞれの位置を示した。調査前に考えていた草鹿家との関係は、書入れなどの情報によれば慎重に判断する必要があることに結果したが、「京都版」の①表紙と②本文、および③刊記という視点からの観察の意味、「江戸・東京版」の発刊当初の状態（1巻1冊本）が明らかになったことは、きわめて大きな成果である。

#### 4. 展望

入れ木による補訂の意味は何であろうか。それはまず綿密なチェックを意味しよう。では、チェックはどこでおこなわれ、どのような意図でチェック後の変更はなされ、いかなる経緯で変更点は伝達されて、ときに版面に反映されたのか。発刊者にとっての正規版は第何版であったか。正規版の本文はどこで印刷され、表紙・刊記はどこで摺られ、どこで製本されたのか。変更前の版を入手していた者に変更内容は、どのように伝達されたか。バリエーションに注意することで、様々な疑問が惹き起される。書誌調査を基礎にするこれらの研究は、本稿で述べた以上の大きな広がりをもって進められている<sup>11</sup>。

そのなか研究会では、『太政官日誌』「京都版」の第1版を探している。第1号の丁付がないもの、第3号の5丁表の後ろから2行目の文字が「只管」ではなく、「唯管」となっていることが、その指標である。いずれも刊記は村上勘兵衛と井上治兵衛である。発見した方は、御手数をおかけしますが、研究会にご一報ください。

また現在、調査にあたって注意しているのは、表紙に直接印刷された題字の比較である。図版2「江戸・東京版」表紙部分（慶応4年第1号～第40号）を見ていただきたい。これは草鹿家文庫の請求番号425の画像を加工して並べたものである。これによれば、「江戸・東京版」第1号～第40号の題字は、もっとも多くみて14種類に分類することができるのではないだろうか（表「江戸・東京版」表紙の「第」字による諸グループ）。このほか、「号」の字についても、多くのバリエーショ

ンがあることが明らかになっている。

つまり、草鹿家文庫本『太政官日誌』「江戸・東京版」(請求番号425)の表紙は、統一感やフォーマット化とは程遠い様相を明瞭に示している。「江戸・東京版」の特徴である、細かな職人手業を存分に示す本文の読みルビ、訓点、意味カナに比べると（前掲の図版1「江戸・東京版」慶応4年第1号（部分））、商品としての「顔」である表紙の不統一は何を意味するのか。江戸の書物問屋が作成した端正な表紙を見馴れている筆者には疑問である。この点の解明は今後の課題としたい。

#### 謝辞

調査にあたって、日本福祉大学経済学部教授・曲田浩和氏、司書・石川宗臣氏をはじめとする付属図書館の皆さまに、ご高配を賜りました。ここに記して、感謝の意を表したいと思います。

#### 注一覧

<sup>1</sup> 戊辰戦争期木版刊行物研究会の発起人は、奈倉哲三（跡見女子大学文学部教授）、箱石大（東京大学史料編纂所准教授）である。研究会の公式サイトは以下の通りである。

<https://sites.google.com/site/boshinjl>

<sup>2</sup> 所在調査の結果は、石田七奈子「『太政官日誌』所在状況一覧表」、同「旧大名家史料群中の『太政官日誌』所在状況一覧表」、同「旧大名家史料群中の『太政官日誌』所在状況・分析データ」をご覧ください。いずれも「『太政官日誌』を対象にした史料学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」WEB版科研報告書(2013)によって閲覧できる。サイトは次の通りである。

<https://sites.google.com/site/dajokannish>

<sup>3</sup> 草鹿家文庫目録編纂委員会編『草鹿家文庫目録』pp.5-13 日本福祉大学付属図書館（1993）

<sup>4</sup> 永井一彰『板木は語る』pp.302-305 笠間書院（2014）

<sup>5</sup> Aカード、Bカードについては、レイアウトの変更、項目の加除といった修正を加え続け、試作を繰り返している。項目の変更についていえば、Bカードで本文匡郭の縦・横の寸法を除いた点を

あげることができる。一般に、匡郭を測る目的は、覆刻かどうかを判定する材料とすることにあるといわれる。覆刻の場合には、数ミリセンチメートルほど匡郭の寸法が縮む。その理由は、覆刻の際に、ばらした版本の各紙を濡らし、裏返して版木に貼り、それを彫刻するのであるが、そののち版木が乾いて収縮するためと言われている。また板木は古くなるに従って収縮するとされており、後印本ほど、匡郭の寸法が縮む傾向があるといわれる。つまり、匡郭の長短が同一板木の印刷の先後を知る材料になる。だが、50年、60年という長いタイムスパンをもついわゆる古典作品の板木（および板権）と比べて、『太政官日誌』の板木の使用期間は短い。また板木の収縮原因は多様であろう。これらの理由から匡郭の計測を止めることにした。なお、2010-2012年度版のAカード・Bカードおよび記入マニュアルについては「『太政官日誌』を対象にした史料学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」WEB版科研報告書を参照されたい。

<sup>6</sup>山口順子作成（「『太政官日誌』を対象にした史料学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」WEB版科研報告書）。

<sup>7</sup>同前。

<sup>8</sup>山口順子「『太政官日誌』諸本比較表による異版の抽出と解析」（「『太政官日誌』を対象にした史料学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」WEB版科研報告書）。

<sup>9</sup>P.46。

<sup>10</sup>「『太政官日誌』を対象にした史料学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」WEB版科研報告書を参照されたい。

<sup>11</sup>同前。

付表 草鹿家文庫425『太政官日誌』細目録

認定資料名	一括情報	形態情報		表紙情報										本文情報					刊記情報			取次	蔵書印など				
		発行年月(表紙)	大きさ(縦mm)	大きさ(横mm)	号数冊数	本文紙枚数	紙見返し(丁)	裏紙見返し(丁)	印刷方法	製本方法	定価	不許割	紙質	色	文様	表題表記方法	内題	巨郭	ルビ	意味カナ	巻尾			不許翻刻	板元名	板元住所	爪見出し
太政官日誌 第1		慶応4年戊辰2月	17.7	11.5	1号冊	1-7	0.5		紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第2		慶応4年戊辰2月	18.1	12.5	1号冊	8-14	0.5	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第3		慶応4年戊辰2月	18.2	12.4	1号冊	15-21	0.5	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第4		慶応4年戊辰3月	18.1	12.4	1号冊	22-28	0.5	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	○に悦
太政官日誌 第5		慶応4年戊辰3月	18.2	12.5	1号冊	29-36	0	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第6		慶応4年戊辰3月	18.2	12.5	1号冊	37-42	0.5	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第7		慶応4年戊辰3月	18.1	12.4	1号冊	43-39	0	0	紙縫じ	1/4	無	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第8		慶応4年戊辰3月	18.1	12.4	2号冊	50-56	0.5	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第9		慶応4年戊辰3月	18.1	12.4	2号冊	57-63	0	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第10		慶応4年戊辰4月	—	—	—	—	—	64-69	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第11		慶応4年戊辰4月	18	12.4	5号冊	70-77	0	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第12		慶応4年戊辰閏4月	—	—	—	—	78-84	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第13		慶応4年戊辰閏4月	—	—	—	—	1-16	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第14		慶応4年戊辰閏4月	—	—	—	—	1-10	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第15		慶応4年戊辰閏4月	—	—	—	—	1-12	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第16		慶応4年戊辰5月	18.2	12.5	5号冊	1-8	0.5	0	紙縫じ	無	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第17		慶応4年戊辰5月	—	—	—	—	1-12	0.5	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第18		慶応4年戊辰5月	—	—	—	—	1-7	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第19		慶応4年戊辰5月	—	—	—	—	1-15	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第20		慶応4年戊辰5月	—	—	—	—	1-14	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第21		慶応4年戊辰5月	18.2	11.9	1号冊	1-18	0	0	紙縫じ	2/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第22		慶応4年戊辰5月	18.1	12.4	1号冊	1-14	0.5	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第23		慶応4年戊辰5月	18.2	12.5	1号冊	1-8	0.5	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第24		慶応4年戊辰5月	18.4	12.5	1号冊	1-14	0.5	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第25		慶応4年戊辰5月	18.2	12.4	1号冊	1-15	0.5	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第26		慶応4年戊辰6月	18.2	12.5	1号冊	1-14	0	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第27		慶応4年戊辰6月	18.3	12.5	1号冊	1-10	0.5	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第28		慶応4年戊辰6月	18.3	12.6	1号冊	1-8	0.5	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第29		慶応4年戊辰6月	18.1	12.4	1号冊	1-9	0	0	紙縫じ	1/4	長方朱印	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第30		慶応4年戊辰夏6月	18.2	12.5	1号冊	1-9	1	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	須原屋茂兵衛	東京	無	無	明治十六年東京實業部寄附 村井勲助蔵(圖書)
太政官日誌 第31		慶応4年戊辰夏6月	18.1	12.4	1号冊	1-8	0.5	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	須原屋茂兵衛	東京	無	無	
太政官日誌 第32		慶応4年戊辰夏6月	18.1	12.4	1号冊	1-8	1	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	須原屋茂兵衛	東京	無	無	
太政官日誌 第33		慶応4年戊辰夏6月	18.1	12.4	1号冊	1-10	0	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第34		慶応4年戊辰夏6月	18.1	12.4	1号冊	1-7	0.5	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	須原屋茂兵衛	東京	無	無	
太政官日誌 第35		慶応4年戊辰夏6月	18.1	12.4	1号冊	1-8	0.5	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	須原屋茂兵衛	東京	無	無	
太政官日誌 第36		慶応4年戊辰夏6月	18.3	12.5	1号冊	1-9	0	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第37		慶応4年戊辰夏6月	18.3	12.5	1号冊	1-10	0	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—
太政官日誌 第38		慶応4年戊辰夏6月	18.4	12.6	1号冊	1-9	0.5	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	須原屋茂兵衛	東京	無	無	
太政官日誌 第39		慶応4年戊辰秋7月	18.4	12.6	1号冊	1-9	1	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	須原屋茂兵衛	東京	無	無	
太政官日誌 第40		慶応4年戊辰秋7月	18.3	12.5	1号冊	1-9	0	0	紙縫じ	無	丸朱印押有	原表紙	生成り	無	打付付・摺り	無	単	有	有	無	無	無	—	—	—	—	—

図版2 「江戸・東京版」表紙部分（慶應4年第1号～第40号）」

太政官日誌 第一  
慶應四年戊辰二月

太政官日誌 第二  
慶應四年戊辰二月

太政官日誌 第三  
慶應四年戊辰二月

太政官日誌 第四  
慶應四年戊辰三月

太政官日誌 第五  
慶應四年戊辰三月

太政官日誌 第六  
慶應四年戊辰三月

太政官日誌 第七  
慶應四年戊辰三月

太政官日誌 第八  
慶應四年戊辰三月

太政官日誌 第九  
慶應四年戊辰三月

太政官日誌 第十  
慶應四年戊辰四月

太政官日誌 第十一  
慶應四年戊辰四月

太政官日誌 第十二  
慶應四年戊辰閏四月

太政官日誌 第十三  
慶應四年戊辰閏四月

太政官日誌 第十四  
慶應四年戊辰閏四月

太政官日誌 第十五  
慶應四年戊辰閏四月



慶應四年戊辰五月  
太政官日誌  
第十六

慶應四年戊辰五月  
太政官日誌  
第十七

慶應四年戊辰五月  
太政官日誌  
第十八

慶應四年戊辰五月  
太政官日誌  
第十九

慶應四年戊辰五月  
太政官日誌  
第二十

慶應四年戊辰五月  
太政官日誌  
第二十一

慶應四年戊辰五月  
太政官日誌  
第二十二

慶應四年戊辰五月  
太政官日誌  
第二十三

慶應四年戊辰五月  
太政官日誌  
第二十四

慶應四年戊辰五月  
太政官日誌  
第二十五

慶應四年戊辰六月  
太政官日誌  
第二十六

慶應四年戊辰六月  
太政官日誌  
第二十七

慶應四年戊辰六月  
太政官日誌  
第二十八

慶應四年戊辰六月  
太政官日誌  
第二十九

慶應四年戊辰夏六月  
太政官日誌  
第三十

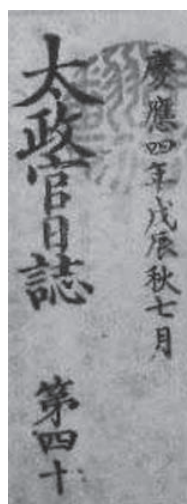
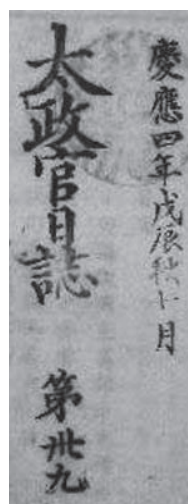
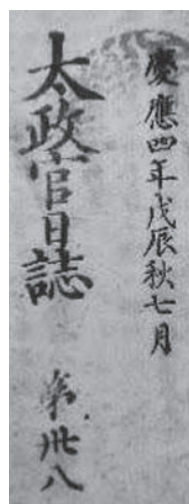
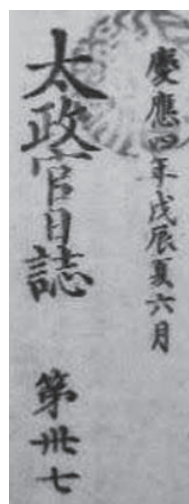
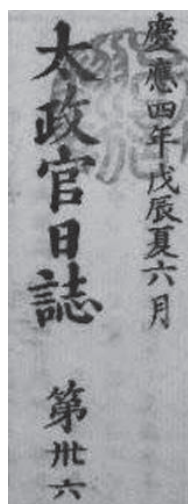
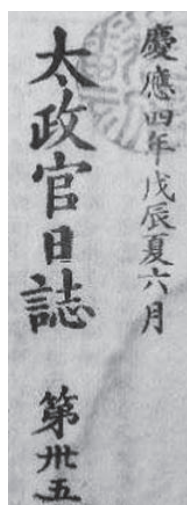
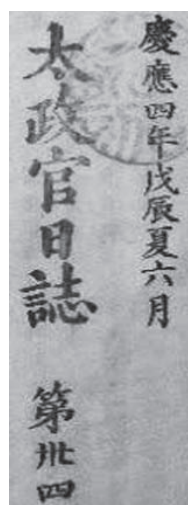
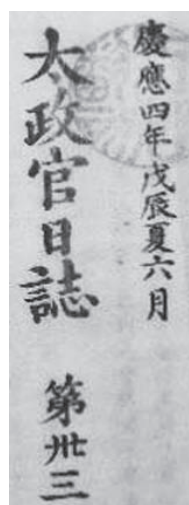
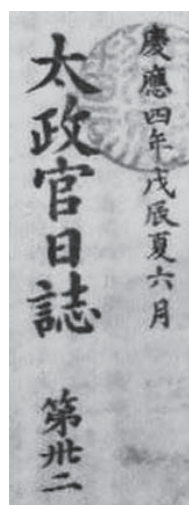
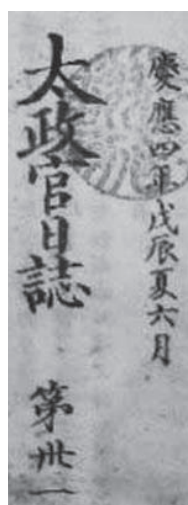


表 「江戸・東京版」表紙の「第」字による諸グループ

- (1) 第1号
  - (2) 第2号・第5号・第6号・第8号
  - (3) 第3号・第7号・第11号
  - (4) 第4号
  - (5) 第9号・第10号
  - (6) 第12号・第15号
  - (7) 第13号・第16号
  - (8) 第17号～第20号、第22号～第24号
  - (9) 第21号
  - (10) 第25号・第26号・第28号・第29号
  - (11) 第27号
  - (12) 第30号・第32号
  - (13) 第31号・第37号・第38号・第39号・第40号
  - (14) 第33号・第34号・第35号・第36号
- 不明 第14号